

# *Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner*

— 黒人の表象としてのアンドロイド —

大地 真 介

【キーワード】 Philip K. Dick、アメリカ文学、アメリカ社会、人種、映画、ポストモダニズム

## 1. Philip K. Dick 再評価の必要性

Philip K. Dick は、史上最も優れた SF 作家の一人というのが通説であるが、むしろ、それまで存在しなかったような文学を SF というジャンルを利用して創造した作家と言う方が正しいと思われる。実際、Dick は、「アメリカ文学史上最もユニークかつ想像力豊かな才能の持ち主の一人」とよく言われ、ポストモダンの思想家 Jean Baudrillard は彼のことを「現代の最も偉大な実験的作家の一人」とみなしており (Sutin, *Shifting* x-xi)、Dick の作品は、アメリカを代表する著作物を出版する The Library of America にも収められている。にもかかわらず、Dick は、*Columbia Literary History of the United States* (1988) や *The Oxford Encyclopedia of American Literature* (2004) ではほんの少し触れられているだけで、*The Cambridge History of American Literature* (1999) に至っては言及さえされていない。つまり、彼は、権威ある文学史や文学事典では軽視あるいは無視され、ある意味正典<sup>キャン</sup>から外れた存在である。今日、社会的、歴史的観点から文学的正典の見直しや拡大が活発<sup>キャン</sup>に行われているが、Dick が単なる SF 作家ではなく再評価に値する作家であることを示すのが本論文の目的である。

Dick についての古典的論文の一つに、「ディック批評の金字塔」とされるマルクス主義文芸批評家 Darko Suvin の “P. K. Dick’s Opus: Artifice as Refuge and World View” (1975) がある (巽 73)。Dick が正当に評価されていないのは、この論文がいまだに影響力を持っているからか、あるいは、同論文を読んでいなくてもその内容と同じことを多くの人が考えているからではないかと筆者は考える。誤解のないように言えば、ナラトロジーを用いて複雑な Dick の作品群を体系化した Suvin は「第一次ディック・ブームの立役者のひとり」であることは紛れもない事実であるが (巽 73)、その一方で、Suvin の論文は大きな問題もはらんでいるように思われる。Dick の批評家の多くは、1960年代後半の作品 *Do Androids Dream of Electric Sheep?* (1968) や *Ubik* (1969) を Dick の最高傑作に含めているが (Sutin, *Divine* 307; Lem 59; Williams 145; D’Ammassa 115)、Suvin は、両作品をそれほど評価せず、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* (1968) や *Ubik* のプロットの「混乱」や不整合性を非難している (19-20)。この点につ

いては、Dick は悪夢的な世界を描こうとしたので、そのプロットは、実際の夢と同様、表面的には不合理で混沌としたものになったと考えられる。そして、Jeff Wagner も述べているように、「Dick の作品のプロットを特色づける矛盾や未解決は、ある意味、主題の延長、多種多様なレベルの知覚を特徴づける不整合の延長」であり、欠点とは言えないのである (70)。

また、Suvin は、Dick の優れた作品は執筆当時のアメリカ社会の「ファシズム」的、「全体主義」的要素に対する批判となりえてしていると指摘しているが、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* や *Ubik* 等については、“From *Now Wait for Last Year* [(1966)] on, it has withdrawn from the earlier richness into an only fragmentary use of his already established model, it has centered on one protagonist and his increasingly private and psychoanalytic problems...” と主張し、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* を「紛れもない失敗作」とみなしている (13-14, 20-21)。しかしながら *Do Androids Dream of Electric Sheep?* は、「紛れもない失敗作」どころか、Suvin 自身が高く評価する Dick の作品、すなわち当時のアメリカ社会のファシズム的要素を批判する作品に該当することを本論文で指摘していきたい。

## 2. Dick の小説とその映画化

まず初めに、Dick の略歴を述べておきたい。Dick は、1928年にシカゴで生まれ、主にサンフランシスコ・ベイ・エリアで育った。カリフォルニア大学バークレー校に入学するも、予備役将校訓練隊への参加を拒否して中退させられる。1963年に出版した *The Man in the High Castle* でヒューゴ賞を受賞し、その後も、*The Three Stigmata of Palmer Eldritch* (1965)、*Do Androids Dream of Electric Sheep?*、*Ubik* といった問題作を次々に著した。1974年には *Flow My Tears, The Policeman Said* を発表してジョン・W・キャンベル賞に輝き、晩年は *VALIS* (1981) 等の宗教色の濃い作品を執筆する。生涯にわたって貧困と精神障害に苦しめられ、1982年に心臓発作で入院中に死去したが、翌年、彼の偉業を讃えてフィリップ・K・ディック記念賞が創設された。<sup>1)</sup> Dick は、長編小説を46冊、短編小説を116編残しているが、自分でも述べているように、彼の作品に共通するテーマは、「現実とは何か」、「真の人間とは何か」という二つの相関した問題であり (Dick, “How” 260, 278)、彼の作品の多くは、現実と非現実、人間性と非人間性の二項対立を脱構築するポストモダニズム小説である。なお、SF という大衆文学と純文学を横断しているという意味においても Dick の小説はポストモダニズム的だといえる。

Dick は、映画界での評価は極めて高く、存命中の Stephen King を除けば、作品が今日最も映画化の対象となっている作家であり (Sutin, *Divine* xi)、これまでに映画化された Dick の小説は10作品を越えている。*Total Recall* (1990)、*Minority Report* (2002)、*A Scanner Darkly* (2006)、*The Adjustment Bureau* (2011) 等、Dick の小説を原作とする映画の世界興行と関連商品の収入を合わせると10億ドル以上にもものぼり、現在も、*Total Recall* のリメイクの製作、および

*Ubik* と “The King of the Elves” (1953) の映画化の企画が進行中である (大森 18)。Dick の小説を原作とする多くの映画の中で最高傑作とされるのが、Dick 自身も「[自作の中で] 最も深遠で想像性豊かな小説」と述べている *Do Androids Dream of Electric Sheep?* を Ridley Scott が映画化した *Blade Runner* (1982, 1992, 2007) である (“Electric Dreamer”; Sutin, *Divine* xi)。同作品は、サイバーパンクの先駆けとなった作品で、映画、文学、美術、建築等、様々な分野の作品に影響を与えており、同じ Scott 監督による *Blade Runner* の新作——前日譚か後日譚——の製作も決定している (Chaney)。

*Blade Runner* は、原作と多くの点で異なっているが、Paul M. Sammon が分析しているように、それは「異なる媒体で表現するのに必要な手を加えた」だけのことであり、「本当に重要なところでは非常に原作に忠実」である (8, 20)。そして、なにより、原作者の Dick が *Blade Runner* を大変気に入っており、同作品の一部を見た彼は、“My life and creative work are justified and completed by BLADE RUNNER” と述べたり (Dick, *Selected* 271)、Scott たちに向かって “Those are not the exact images, but the texture and tone of the images I saw in my head when I was writing the original book! The environment is exactly as how I’d imagined it! How’d you guys do that? How did you know what I was feeling and thinking?” とさえ言っていた (Sammon 284)。以上のことから、本論文では、*Blade Runner* も視野に入れつつ *Do Androids Dream of Electric Sheep?* について考察していきたい。<sup>2)</sup>

### 3. 人間とアンドロイドの二項対立の脱構築

先述したように、Dick の作品に共通するテーマは、「真の人間とは何か」「現実とは何か」であり、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* は、「人間とアンドロイドは本当に異なる存在なのか」、「人間とアンドロイドの区別をよりどころとしている現実は本当に確かなものなのか」を問う作品、すなわち人間とアンドロイドの境界のあいまいさを描く作品である。以下、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* が具体的に人間とアンドロイドの二項対立を脱構築している箇所を順番に確認していきたい。

まず、作品の冒頭で、アンドロイドを狩る賞金稼ぎの主人公 Rick Deckard は、“The Nexus-6 android types surpassed several...classes of human specials in terms of intelligence. In other words, androids equipped with the new Nexus-6 brain unit had from a sort of rough, pragmatic, no-nonsense standpoint evolved beyond a major—but inferior—segment of mankind” と述べている (455)。そして、あるレニングラードの精神科医のグループは、人間とアンドロイドを区別できるとされる Voight-Kampf 検査は必ずしも有効でないと考えており (461)、アンドロイドを製造する Rosen 社の Rachael Rosen は、その検査はやがて全く無効になると述べている (569)。

オペラ歌手 Luba Luft に対する捜査の際には、彼女との下記の会話を契機として、Luft、Crams 巡査、Garland 警視、賞金稼ぎの Phil Resch、Deckard のうち誰が人間で誰がアンドロイドなのか Deckard 自身にも分からなくなる。

“An android,” he said, “doesn’t care what happens to any other android. That’s one of the indications we look for.”

“Then,” Miss Luft said, “you must be an android.”

That stopped him; he stared at her.

“Because,” she continued, “Your job is to kill them, isn’t it? You’re what they call—” She tried to remember.

“A bounty hunter,” Rick said. “But I’m not an android.”

“This test you want to give me.” Her voice, now, had begun to return. “Have you taken it?”

“Yes.” He nodded. “A long, long time ago; when I first started with the department.”

“Maybe that’s a false memory. Don’t androids sometimes go around with false memories?”

Rick said, “My superiors know about the test. It’s mandatory.”

“Maybe there was once a human who looked like you, and somewhere along the line you killed him and took his place. And your superiors don’t know.”(507)

Phil Resch も、自分が人間かアンドロイドか分からなくなり、彼は、自分は動物を飼育してかわいがっているのでアンドロイドではないはずだと言うが、Deckard は、アンドロイドがそのようなことをする例は——自分が知っているだけでも——二件あると述べている (527)。

また、全人類が信奉する Mercer 教についてアンドロイドの Irmgard Baty が人間の J. R. Isidore に向かって “Isn’t it a way of proving that humans can do something we can’t do? Because without the Mercer experience we just have your word that you feel this empathy business, this shared, group thing.” と言っているように、Mercer 教は、人間とアンドロイドを区別する絶対的存在であったが (583-84)、結局、教祖はハリウwoodsの三文役者が演じていたにすぎないインチキ宗教であることが判明する。さらに、人類にとって Wilbur Mercer の次に「最も重要な人間」であるはずのテレビ司会者 Buster Friendly は (484)、実はアンドロイドだということも明らかになる (584)。なお、*Blade Runner* の製作についてのドキュメンタリー映画 *Dangerous Days: Making Blade Runner* によれば、当初、アンドロイドの製造主 Eldon Rosen (映画では Eldon Tyrell) も実はアンドロイドだったという設定にする予定であった。

#### 4. ナチス、ユダヤ人の表象としてのアンドロイド

以上確認したように *Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* では人間とアンドロイドの二項対立は解体されているが、その二項対立はナチスの問題と深くつながっている。*The Man in the High Castle* でナチズムを扱った Dick は、ナチスやファシズムのことを「自分が生涯憎み続ける敵」と言っており (Wagner 77)、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* のアンドロイドの冷酷非情な面はナチスの「非人間的」性質の象徴であると述べている (Dick, “Philip”)。*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* のアンドロイドは、このようにナチスを表象しているが、同時にユダヤ人の象徴でもある。例えば、*Blade Runner* が多用している光と「ガス (煙)」の明暗対照法の観点から、加藤幹郎は、アンドロイドがユダヤ人も表象していることを指摘している。

光の拡散を利用したこうした照明法は、もっぱら一九三〇年代に欧州から米国に亡命してきたユダヤ人たちによって創造された。「暗黒映画」と呼ばれるこの新ジャンルは、数百万のユダヤ人を強制収容所の中で虐殺したナチス・ドイツの悪夢を反映する。…こうした意味で、一九八〇年代に SF 映画として撮られたはずの『ブレードランナー』は、じつは人間の寓話を物語る四〇年代の暗黒映画を継承するものとして製作されている。光と影の重層的な交錯によって、この映画は人間が人間を理解することの困難さを隠喩的に物語り、ひいてはユダヤ人たちが強制収容所のなかに見た地獄をレプリカント [アンドロイド] の苦境へと翻案することに成功している。(125)

ここで、*Blade Runner* におけるアンドロイドの「苦境」について確認しておく、アンドロイドについて Harry Bryant 警視は、“They were designed to copy human beings in every way except their emotions. The designers reckoned that after a few years they might develop their own emotional responses” と説明しているが、人間に追われるアンドロイド Roy Baty が、盟友 Leon Kowalski が殺されたことを恋人 Pris に伝える時と彼女が殺された時に言葉を詰まらせて深い悲しみに顔をゆがめる場面は、アンドロイドが感情を持っていることはもちろんのこと、むしろ人間のほうがアンドロイドよりも非情であることを示す。そのことと、作品の終盤で Roy による復讐で息も絶え絶えの Deckard に向かって Roy が発する「恐怖にまみれて生きるというのはひどい体験だろう？ 奴隷であるというのはそういうことだ」という言葉は、*Blade Runner* が、「奴隷」と呼ばれて人権などないアンドロイドの「苦境」を訴える作品であることを明示している。

Paul M. Sammon によれば、このような点が原作と映画の違いだと Dick は主張していた。

According to Dick, the main source of contention between the two men [Ridley Scott and Dick] was a primary one: that of the basic difference between “what Ridley and I saw *Sheep*— and, by inference, *Blade Runner*— as being all about.

“To me, the replicants [androids] are deplorable. They are cruel, they are cold, they are heartless. They have no empathy, which is how the Voight-Kampf test catches them out, and don’t care about what happens to other creatures. They are essentially Less-than-human entities.

“Ridley, on the other hand, said he regarded them as supermen who couldn’t fly. He said they were smarter, stronger, and had faster reflexes than humans. ‘Golly!’ That’s all I could think of to reply to that one. I mean, Ridley’s attitude was quite a divergence from my original point of view, since the theme of my book is that Deckard is dehumanized through tracking down the androids...”(285)

確かに、Dick が講演 “The Android and the Human” (1972) や講演の草稿 “Man, Android, and Machine” (1976) でも主張しているように、Dick にとってアンドロイドは一義的には「非人間性」を表すものであるが (“Android” 209; “Man” 211-12)、しかしながら——“supermen” というのは言い過ぎだとしても——*Do Androids Dream of Electric Sheep?* を誤読しているのは、Scott ではなくて作者の Dick の方である。まず、Dick は、「Voight-Kampf 検査はアンドロイドを見破る」と言っているが、先述したとおり、Voight-Kampf 検査は人間とアンドロイドを区別できない可能性があるし将来的には全く区別できなくなると *Do Androids Dream of Electric Sheep?* に記されている。また、Dick は、「私にはアンドロイドは許し難い存在だ。残酷で、冷淡で、非情だ。彼らは全く感情移入することができない」と言ったり、「Deckard がアンドロイドを追い詰めていく過程で非人間的になっていくというのが私の本のテーマだ」と主張したりしているが、Don D’Amassa も述べているように、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* でも「明らかにアンドロイドは迫害されるマイノリティ」としても描かれており (119)、Deckard は、「非人間的」になるどころか、そのようなアンドロイドに「感情移入」している。以下、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* においても、迫害される者としてアンドロイドが同情的に描かれている箇所、また、Deckard も彼らに「感情移入」している箇所を見ていきたい。

まず、「迫害されるマイノリティ」としてアンドロイドが同情的に描かれている箇所を挙げると、アンドロイドを狩る賞金稼ぎの Deckard に向かって、彼の妻 Iran は、“You’re a murderer hired by the cops.... [You kill] those poor andys [androids]” と言い (435)、アンドロイドの Rachael Rosen は、“You have no difficulty viewing an android as inert.... So you can ‘retire’ it, as they say” と言っており (462)、彼女たちは、冷酷なのは人間の方であってアンドロイドは犠牲者であるとみなしている。次に、Deckard がアンドロイドに対して同情や「感情移入」する箇所を見ていくと、まず、歴史的名歌手に匹敵すると Deckard が考えるアンドロイドのオペラ歌手 Luft が、死ぬ前にムクの絵の複製を求めると、Deckard は高価な画集を買ってやる。そして、彼女は、Deckard の制止を振り切った Phil Resch によって次のように殺される。

Phil Resch fired, and at the same instant Luba Luft, in a spasm of frantic hunted fear, twisted and spun away, dropping as she did so. The beam missed its mark but, as Resch lowered it, burrowed a narrow hole, silently, into her stomach. She began to scream; she lay crouched against the wall of the elevator, screaming. Like the picture [Munch's *The Scream*], Rick [Deckard] thought to himself, and, with his own laser tube, killed her. (530-31)

Deckard は、“She was really a superb singer....I don't get it; how can a talent like that be a liability to our society?” と思い (532)、さらに、次のように Luft に「感情移入」している。

Always he [Deckard] had assumed that throughout his psyche he experienced the android as a clever machine—as in his conscious view. And yet, in contrast to Phil Resch, a difference had manifested itself. And he felt instinctively that he was right. Empathy toward an artificial construct? he asked himself. Something that only pretends to be alive? But Luba Luft had seemed *genuinely* alive; it had not worn the aspect of a simulation. (535)

作品の終盤では、Deckard は、アンドロイドの Rachael と情を交し、「Rachael は朗らかになり、間違いなく、彼が知っているどの娘にも劣らず人間らしくなった」と感じており (574)、作品の最後では、彼は、生命があるならば「人工」のものかどうかは大した問題ではないという認識に達している (606)。

以上みてきたように、*Blade Runner* と同様に *Do Androids Dream of Electric Sheep?* では、「迫害されるマイノリティ」としてアンドロイドが同情的にも描かれ、Deckard も彼らに「感情移入」している。したがって、間接的にナチスの問題を扱う *Do Androids Dream of Electric Sheep?* および *Blade Runner* では、アンドロイドは、Dick が述べているようにナチスの「非人間性」を表象すると同時に、「迫害されるマイノリティ」であるユダヤ人も表象しているのである。そして、ナチスは、アンドロイドでもあり、アンドロイドを迫害する人間でもあるという意味においても、人間とアンドロイドの二項対立は脱構築されているといえる。

## 5. 黒人を表象するアンドロイド

これまで考察してきたように、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* のアンドロイドは、ナチスあるいはユダヤ人の象徴であるが、それと同時に黒人も表象していると筆者は考える。両作品でアンドロイドは「奴隷」と呼ばれているが、アメリカで奴隷と言えば、やはり黒人奴隷である。実際、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* において、「奴隷」であるアンドロイドが黒人奴隷に結び付けられている箇所がある。それは、「奴隷」であるアンドロイドを売るためのコマーシャルの次のくだりである。“The TV set shouted, ‘—duplicates the

halcyon days of the pre-Civil War Southern states! Either as body servants or tireless field hands, the custom-tailored humanoid robot...’ (445-46)。つまり、人間とアンドロイドの関係は、白人と黒人の関係に重ねられているのである。

Dick は、随筆 “Naziism and *The High Castle*” で、“[We] might identify with the war guilt of the Germans because they’re so similar to us” という Harry Warner の言葉を支持し、ファシズムはヨーロッパの問題だけでなくアメリカの問題でもあるとしている (112-13)。そして、Dick は、ナチスとユダヤ人について論じる中で、アメリカで白人が黒人の児童たちを爆撃した事件の話を持ち出しており、社会的に迫害された者としてユダヤ人と黒人を同一視しているのである (116-17)。したがって、ユダヤ人の象徴であるアンドロイドは、上記のアンドロイドのコマーシャルが示しているように黒人も表象しているといえる。公民権法成立直後で全米的な人種差別撤廃運動のさなかの1966年に、アメリカのリベラリズムの本拠地であるサンフランシスコ・ベイ・エリアで書かれた *Do Androids Dream of Electric Sheep?* は、黒人にまつわる当時の社会問題を反映しているのである。<sup>3)</sup>

*Do Androids Dream of Electric Sheep?* においてアンドロイドが黒人を髻髷させる箇所を見ていくと、同作品のアンドロイドの中で最も重要な役割を果たす Rachael は、顔は「色黒 (dark)」とされており (562)、髪とまつ毛と瞳は「黒」であると繰り返し描写されている (462-63, 465, 567, 596)。なお、Rachael と同型のアンドロイドで瓜二つの Pris も当然ながら上記の容姿である (479)。また、アンドロイドが、奴隷の境遇から抜け出すも、人間に溶け込もうとして人間に殺される状況は、黒人が、奴隷制度から解放されるも、白人に溶け込もうとすると白人にリンチされたことを髻髷させる。さらに言えば、人間とアンドロイドの結婚は法律で禁止されているが (575)、それは、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* が執筆された1966年の時点で白人と黒人の結婚を禁じる法律がアメリカの16州でまだ残っていた (Wilson 187) ことを思い起こさせるものである。

次に、*Blade Runner* においてアンドロイドが黒人を髻髷させる箇所を見ていくと、同作品に登場するアンドロイドは皆、〈黒〉のイメージを帯びている。Rachael は、原作と同じく髪も瞳も黒く、また、アンドロイドであることが明らかになる場面では黒ずくめの服を身に付けている。Roy Baty も Leon Kowalski も真っ黒なロングコートを着ており、Zhora の肌は浅黒く、Pris は、J.R. Isidore (映画では J.F. Sebastian) にアンドロイドとして正体を現すとき顔を黒く染めている。なお、*Blade Runner* は多民族都市であるロサンゼルスが舞台であるが、極めて不自然なことに黒人が登場しないに等しい。大都会の群衆として大勢のエキストラが頻繁に登場するが、そのほとんどは白人や黄色人種であり、黒人は4名くらいしか確認できない。作品の最後のクレジット・タイトルに挙げられている19名の主要登場人物に至っては白人と黄色人種だけで黒人は皆無である。これらのことは、実は黒人はアンドロイドとして登場していること、すなわちアンドロイドは黒人の表象であることを暗示していると考えられる。



以上みてきたように、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* において、アンドロイドは黒人の象徴でもあり、人間とアンドロイドの二項対立は白人と黒人の二項対立も表しているのである。とすれば、両作品において、人間とアンドロイドの二項対立は脱構築されている以上、白人と黒人の二項対立も解体されているのかということが当然問題になってくる。ここで重要なのは、人間とアンドロイドは見分けがつきにくいという点である。一見、白人と黒人は見分けがつくように見えるが、実はそうとも言えない。まず、全く白人と見分けがつかない〈黒人〉もあり（悪名高い“*One-drop rule*”では、外見的には白人であったとしても一滴でも黒人の血が混じっていれば黒人とみなされる）、それは白人の血が多く入った混血黒人である。それでは、アンドロイドは、そのような〈白人の血を多く持つ混血黒人〉のみを指し、普通の黒人は指さないのかと言えば、そもそも今日のアメリカの黒人は、基本的に混血黒人である。すでに黒人が奴隷としてアメリカに連れてこられる前にポルトガルの植民地で白人の血が入る場合も多々あったし（Wilson 184）、また、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* で多くの女性のアンドロイドが人間の愛人にされていたように（*Do Androids* 537; *Blade Runner* では例えば Pris が慰安用のアンドロイドだった）、アメリカで女性の黒人奴隷はしばしば白人から性的に搾取されていた——それは、〈財産〉たる奴隷を増やすことにもつながった——ことは公然の秘密である（Wilson 185）。実際、今日のアメリカで、アフリカの黒人のように真っ黒な肌をしている黒人はいないに等しく、明らかにアメリカの黒人には白人の血が混じっている。つまり、アメリカでは白人は自分たちと黒人たちを区別しようしてきたが、そもそもその黒人は白人の〈血を分けた兄弟姉妹〉なのである。したがって、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* における白人と黒人の二項対立は、厳密に言えば白人と〈白人の血を持つ混血黒人〉の二項対立であり、白人と〈白人の血を持つ混血黒人〉の境界はあいまいなものである以上、その二項対立は自ずと脱構築されているものだといえる。

*Do Androids Dream of Electric Sheep?* が執筆された1960年代中盤のアメリカでは、法律上は何とか黒人の公民権が認められた形だったが、人種差別撤廃運動がまだ盛んだったことが示すように、黒人差別はなお根強く残っていた。その根強い黒人差別は、無論もともと白人が黒人を奴隷制度で縛ったり集団でリンチしたりしていたことの延長であるが、そのような黒人差別は、ナチスによるユダヤ人への差別や虐待と本質的には同じものである。そのことを Dick が見抜いていたことは、先ほど述べたように“*Naziism and The High Castle*”から明らかであり、彼の *Do Androids Dream of Electric Sheep?* は、当時の一種ファシズム的な黒人差別を批判的に反映しているといえる。つまり、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* は、Darko Suvin が言うような「紛れもない失敗作」どころか、Suvin 自身が高く評価する Dick の作品、すなわち当時のアメリカ社会のファシズム的要素を批判する作品に分類される小説なのである。

## 6. 結論

*Do Androids Dream of Electric Sheep?* と *Blade Runner* における人間とアンドロイドの二項対立の脱構築は、本論文で述べてきたように、ナチスをめぐる二項対立に加えて、白人と黒人の二項対立の解体を表している。*Do Androids Dream of Electric Sheep?* では、先述したように主人公 Deckard は、途中自分が人間かアンドロイドか分からなくなって苦悩し、*Blade Runner* でも、Deckard が実はアンドロイドである可能性が作品の最後で示唆されるが、それらのことは、白人と黒人の二項対立の脱構築の観点から見れば、主人公 Deckard は自分が白人か黒人か分からず苦悩していることになる。とすれば、自分が白人か黒人か分からず苦闘する人物を主人公とする、アメリカ文学を代表する作品の一つ William Faulkner の *Light in August* (1932) の重いテーマを、*Do Androids Dream of Electric Sheep?* は引き継いでいるといえる。実際、*Light in August* でも人種の問題はファシズムと密接に結び付いており、主人公 Joe Christmas は、ナチスの先駆的存在と Faulkner が言う Percy Grimm によって虐殺されるのである (Gwynn 41)。

以上考察してきたように、Dick の代表作の一つ *Do Androids Dream of Electric Sheep?* は、Darko Suvin が高く評価する〈アメリカ社会のファシズム的要素を批判する作品〉に該当し、SF 小説の範疇を越えた深いテーマを扱っている。冒頭で述べたように今日の映画界における Dick の再評価には目を見張るものがあるが、文学批評界においても早急に彼の作品を評価しなおす必要があるといえる。

## 注

- 1) Dick は、幻覚を見たり、作品で統合失調症に冒されたような世界を描いたりしている点から (Jameson 32; Nicholls 201)、統合失調症を患っていたと言われることがあるが、Dick 自身は、精神科医の診断を何度も受けたが精神病ではなかったと言っているし (Platt 156)、Dick の友人は、彼の幻覚や妄想は長年の薬物依存によるものだと述べている (Wagner 79)。Dick の言動や作品を再分析した精神科医の香山リカは、彼は統合失調症ではなくて境界性人格障害だったと診断している (180-82)。
- 2) *Blade Runner* には大きく分けて3つのヴァージョンがあり、最初のヴァージョンは監督の Scott に編集の最終決定権はなくプロットについても彼にとって不本意な形での劇場公開となったが、1992年には Scott が自らの意図に沿って編集しなおした“The Director’s Cut”版が、2007年にはそれをさらに修正した“The Final Cut”版が劇場公開された。本論文で *Blade Runner* に言及する際は、決定版たる“The Final Cut”版を指すこととする。
- 3) Dick の実生活における黒人との関係について言えば、彼は、近所の黒人と親しく付き合い、急進的な黒人人権活動家の友人もあり、Dick によれば警察は彼のことを「黒人びいき」とみ

なしていた (Williams 36-39)。

## 引用文献

- Bercovitch, Sacvan, ed. *The Cambridge History of American Literature: Prose Writing, 1940-1990*. Vol. 7. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Blade Runner*. Dir. Ridley Scott. Perf. Harrison Ford, Rutger Hauer, and Sean Young. 1982; The Director's Cut, 1992; The Final Cut, 2007. Warner 2007. DVD.
- Chaney, Jen. "Ridley Scott to Make Another 'Blade Runner' Movie." *Washington Post*. 18 Aug. 2011. 25 Sep. 2011 <[http://www.washingtonpost.com/blogs/celebritology/post/ridley-scott-to-make-another-blade-runner-movie/2011/08/18/gIQAlldmNJ\\_blog.html](http://www.washingtonpost.com/blogs/celebritology/post/ridley-scott-to-make-another-blade-runner-movie/2011/08/18/gIQAlldmNJ_blog.html)>.
- D'Amassa, Don. *Encyclopedia of Science Fiction: The Essential Guide to the Lives and Works of Science Fiction Writers*. New York: Facts On File, 2005.
- Dangerous Days: Making Blade Runner*. Dir. Charles de Lauzirika. Perf. Ridley Scott, Harrison Ford, and Michael Deeley. 2007. *Blade Runner*. DVD.
- Dick, Philip K. "The Android and the Human," Sutin, *Shifting* 183-210.
- . *Do Androids Dream of Electric Sheep? Four Novels of the 1960s: The Man in the High Castle; The Three Stigmata of Palmer Eldritch; Do Androids Dream of Electric Sheep?; Ubik*. Ed. Jonathan Lethem. New York: Library of America, 2007. 431-608.
- . "How to Build a Universe That Doesn't Fall Apart Two Days Later." Sutin, *Shifting* 259-80.
- . "Man, Android, and Machine." Sutin, *Shifting* 211-32.
- . "Nazism and *The High Castle*." Sutin, *Shifting* 112-17.
- . "Philip K. Dick: The *Blade Runner* Interviews." By Paul M. Sammon. *Blade Runner*. DVD.
- . *The Selected Letters of Philip K. Dick: 1980-1982*. Ed. Don Herron. Vol. 6. Nevada City: Underwood, 2009.
- "The Electric Dreamer: Remembering Philip K. Dick." Dir. Charles de Lauzirika. *Blade Runner*. DVD.
- Elliott, Emory, ed. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia UP, 1988.
- Gwynn, Frederick L., and Joseph L. Blotner, eds. *Faulkner in the University*. Charlottesville: UP of Virginia, 1959.
- Jameson, Fredric. "After Armageddon: Character Systems in *Dr. Bloodmoney*." *Science-Fiction Studies* 2:1 (1975): 31-42.
- Lem, Stanislaw. "Philip K. Dick: A Visionary Among the Charlatans." *Science-Fiction Studies* 2:1

(1975): 54-67.

Nicholls, Peter, ed. *Science Fiction at Large: A Collection of Essays, by Various Hands, about the Interface between Science Fiction and Reality*. New York: Harper, 1976.

Parini, Jay, ed. *The Oxford Encyclopedia of American Literature*. 4 vols. Oxford: Oxford UP, 2004.

Platt, Charles. *Dream Makers: Science Fiction and Fantasy Writers at Work*. Rev. ed. New York: Ungar, 1987.

Sammon, Paul M. *Future Noir: The Making of Blade Runner*. New York: Harper, 1996.

Sutin, Lawrence. *Divine Invasions: A Life of Philip K. Dick*. New York: Carroll & Graf, 2005.

———, ed. *The Shifting Realities of Philip K. Dick: Selected Literary and Philosophical Writings*. New York: Vintage, 1995.

Suvin, Darko. "P. K. Dick's Opus: Artifice as Refuge and World View." *Science-Fiction Studies* 2:1 (1975): 8-22.

Wagner, Jeff. "In the World He Was Writing About: The Life of Philip K. Dick." *Foundation* 34 (1985): 69-96.

Williams, Paul. *Only Apparently Real: The World of Philip K. Dick*. Encinitas: Entwhistle, 1986.

Wilson, Charles Reagan, ed. *The New Encyclopedia of Southern Culture*. Vol. 13. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2009.

大森望、「わたしたちが依って立つ現実を疑うディックの作品」、東宝ステラ編『アジャストメント』、東宝出版、2011年、18-19頁。

加藤幹郎、「フィリップ・K・ディック——真実の観察者」、加藤幹郎編『ハリウッドの時代』、週刊朝日百科世界の文学44、朝日新聞社、2000年、122-25頁。

香山リカ、「ディック世界の精神分析」、早川書房編集部編『フィリップ・K・ディック・レポート』、2002年、176-82頁。

巽孝之、「チープなギャグにしてくれ——グリマング二部作を読むために」、『ユリイカ』特集「P・K・ディックの世界」、1991年1月、70-79頁。

## ***Do Androids Dream of Electric Sheep?* and *Blade Runner*: Androids as a Representation of African Americans**

Shinsuke OHCHI

Philip K. Dick is considered to be one of the most unique and visionary talents in the history of American literature. Moreover, postmodern philosopher Jean Baudrillard regards him as “one of the greatest experimental writers of our era.” Nevertheless, authoritative literary critics have undervalued Dick for a long time. This study aims at proving that his noteworthy work should be more focused in the field of literary academics.

*Do Androids Dream of Electric Sheep?* is one of Dick’s masterpieces and its essentially apt film adaptation, *Blade Runner*, was successful all over the world. Although Darko Suvin, a prominent literary critic, savages *Do Androids Dream of Electric Sheep?*, note that this book is not a mere science fiction novel but a complex postmodernist novel. In this novel, Dick deconstructs the boundary oppositions between human beings and androids, “authentic human beings” and the Nazis, and the Nazis and Jews.

My interpretation of the book is that the androids represent African Americans as well as Jews. In his essay “Naziism and *The High Castle*,” Dick remarks that fascism is a serious problem in not only Europe but also the United States and identifies Jews with African Americans because both groups were persecuted by their respective societies. *Do Androids Dream of Electric Sheep?*, which was written in the mid 1960s, reflects the problem of deep-rooted discrimination against African Americans at that time. In short, *Do Androids Dream of Electric Sheep?* is a serious novel that criticizes the fascist element in the American society.

Dick is highly regarded in the movie world today, and his novels have been frequently adapted as films. Literary critics should immediately appreciate his novels, whose themes are considerably profound.